

**農林害虫防除研究会** Agricultural Insect Pest Management Society of Japan

## *News Letter No.25*

Newsletter of The Agricultural Insect Pest Management Society of Japan No.25

2010年9月30日

研究会所在地：茨城大学農学部環境動物昆虫学研究室内

〒300-0393 茨城県稲敷郡阿見町中央3-21-1

ホームページ： <http://agroipm.ac.affrc.go.jp/narc.html>

### 巻頭言

## 防除技術は生産者に使われて育つ

行徳 裕

(熊本県農業研究センター)

本研究会は農作物や樹木に被害を与える害虫の防除に関する技術や情報を発表、あるいは交換するため設立された研究会です。害虫防除は、昆虫の分類や生態、農薬などの防除手段、作物の栽培や樹木の育成技術など多様な分野を包含する総合科学です。その懐は深く、基礎研究から応用技術まで含みます。当然、発表、交換される情報は多種多様ですが、エンドユーザーである生産者にとって価値がある防除技術を開発する、情報を発信する、という目的は共通しています。

農薬などの防除資材や使用技術の開発者は、従来の資材や技術より、さらに高い効果を求めて研究しがちです。しかし、それだけでは生産者が使う防除技術にはなりません。生産者は、効果だけでなく、防除技術の経済性や作業性などの要素を総合的に評価して、導入を決定します。それぞれの項目には、「高すぎず、低すぎず、ちょうど良い」といった生産者特有の「値頃感」というものが存在します。この値頃感は、作物の種類、防除対象となる害虫種、栽培時期や方法で異なりますし、開発者が持っている開発基準と必ずしも一致しません。開発者は常に生産者の値頃感を意識し、技術を開発することが求められます。また、技術が普及にうつされても、普及の現場で発生する問題に対応し、より生産者の値頃感に近い＝普及性の高い技術へ、と育てていくことが大切です。

例えば、野菜類に利用されているネオニコチノイド系粒剤。抵抗性の発達により有効薬剤が不足していたワタアブラムシやタバココナジラミ、ミナミキイロアザミウマなどの防除薬剤として開発、登録されました。カメムシ目害虫を中心に高い効果を長期間維持する優れた薬剤であり、浸透移行性が高く、省力的な定植時植穴混和处理が可能な薬剤でもあります。生産者の評判は上々でした。ただし、開発者が省力的と考えた定植時植穴混和处理に対しては使いにくいという

不満、つまり開発者と生産者の値頃感の相違、がありました。

定植には、植穴掘り、苗の運搬、定植、定植後の灌水などの作業があり、手間と時間がかかります。定植時植穴混和処理を採用すると、粒剤の秤量、植穴への処理、土壌との混和する、という作業が追加されます。研究所で実施する、数十株規模の試験ではたいした手間ではありません。しかし、数千株を1日で定植する生産者にとってみれば、大幅な労力増となります。

生産者の不満は新たな技術開発のニーズとなります。この場合、「定植時以外に処理して労力を分散したい」となります。このニーズに応じて、育苗期や育苗期後半株元処理が開発、普及されました。このことで、生産者の値頃感に一步近づきましたが、新たに「粒剤をポットやセル毎に処理するのに手間がかかる」や「育苗期後半の苗は葉が茂って、粒剤を株元に処理しにくい」、「セル容器に処理すると粒剤がこぼれやすい」などの問題が既に提示されています。生産現場はニーズの宝庫、問題が尽きません。

防除技術では、新規化合物や新たな防除素材の開発、新発生害虫や薬剤抵抗性に関する研究が注目されがちです。学会からも評価され、研究業績の目安となる**impact factor**の高い雑誌への投稿も可能です。しかし、防除技術は開発者ではなく生産者のもの、「生産者が使ってなんぼ」です。目立ちませんが、研究の成果を現場の状況にあわせて改良し、普及につなげる技術開発の役割は極めて重要で、その結果は**impact factor**と同じように評価されるべきものです。近年、国公立研究機関でも研究の評価に、普及率や経済効果を取り入れるようになってきています。生産者に使われる防除技術の開発を目指す本研究会にとって、追い風といえるでしょう。

現場で発生する問題を把握するためには、開発を担当する大学や独法、公設、民間の研究者、技術指導を担う都道府県、農協、企業の技術者と主役である生産者が害虫防除に関する様々な情報を交換し、共有する必要があります。本研究会は、全ての害虫防除関係者に開かれた数少ない集まりです。年1回開催される大会では、研究者、技術者、生産者が200名以上参加し、現場の問題を中心に発表します。個人の情報網では集められない現場の広範な情報も、本大会で得ることができます。会員数の減少に悩む学会が多いなか、本研究会の会員数は順調に増加し、2009年の会員数は485名に達しています。このことは、本研究会の趣旨が広く理解され、その必要性が年々高まっていることを示していると考えます。

2010年から2ヵ年間、本研究会の会長を努めることになりましたが、これまでの方針を受け継ぎ、会員相互の情報交換を活発にすることで本研究会が生産者に使われる防除技術の「ゆりかご」となるよう、努力したいと考えています。会員各位におかれましても、現場の生の声を積極的に発表、投稿していただくよう、よろしく願いいたします。(2010年6月27日受領)

## ニュース

### チリカブリダニが静岡県の茶園で蔓延(はびこ)り始めた!?

小澤朗人

(静岡県農林技術研究所茶業研究センター)

チリカブリダニ *Phytoseiulus persimilis* は、言わずと知れた我が国で最も有名な導入天敵です。我が国では1969年に、静岡農試において深沢永光氏らにより施設イチゴで初の放飼試験が行われました。筆者も1990代中頃に、コパート社等の製品の農薬登録に当たって施設作物で放飼試験を行った経験があります。農薬登録されている現在では、県内の施設イチゴで使用されています。

ところで、チリカブリダニ(以下、チリ)を日本に紹介した故・森樊須先生の著書「天敵農薬—チリカブリダニその生態と応用—」では、「休眠性を持たないこのカブリダニが土着できるのは、わが国では亜熱帯気候の地方(沖縄や南九州)に限られるでしょう」とあります。また、1970年代初頭に静岡県(旧)金谷町の農水省茶試において、チャでの放飼試験と越冬について調査した刑部勝博士の報告では、「露地茶園という立地条件では越冬困難であるために、チリが土着しうる可能性は少ない」とされています。従って、亜熱帯ではない静岡県では、あくまでイチゴのような施設内だけで越冬可能であり、茶園のような野外に土着することはあり得ないと考えられてきました。

ところが、2009年5~6月に、茶園のカブリダニ類の生物多様性を調べる目的で、県内延べ48箇所の茶園からカブリダニ類を採集して種を同定(豊島真吾博士による)した結果、2箇所の茶園からチリが見つかりました(2010年応動昆大会で発表)。さらに、本年も同様の調査を始めていますが、すでに5箇所以上の茶園でチリが見つかりました(周辺にイチゴはありません)。それどころか、チリがカブリダニ類の優占種となっている茶園さえ確認しました。チリは、体色が赤く大きさも土着のケナガカブリダニなどより一回り大きいので非常に目立ちます。私は、これまで様々な調査で茶園のカブリダニを見てきましたが、赤い大きなカブリダニが叩き落としでバットに落ちてくる光景は、初めての経験でした。最初はこの虫が一体何なのかわからず、ルーペで観察して初めてカブリダニと判別できたくらいです。なお、チリ初確認の時期については、2009年2月に県防除所の古木孝典氏(現・農業大学校)と西島卓也氏(現・伊豆研究センター)が巡回調査の折に「まだ冬なのに、変な赤いカブリダニが茶園にたくさんいる」と県東部の茶園から私の所に持ち込んだカブリダニがまさにそのようでした(次ページ写真)(実は、その時は茶園にチリがいるという発想が全くなかったもので、同定はうやむやにしまいました)。

考えてみますと、チャは永年性の常緑樹ですから、茶園には年中カンザワハダニがいます。ハダニに完全に依存するとされるチリにとっては、個体群を半永続的に維持できる条件は整っていると言えます。しかし、今になって茶園で土着化しつつあるのは一体なぜなのか?地球温暖化の影響で越冬できるようになったためか?あるいはチリそのものが環境に適応してきたためか?また、周囲

に全くイチゴのない牧之原の茶園でなぜ発生しているのか？謎だらけです。いずれにしても、生物のしたたかな生命力を感じるとともに、生態系攪乱の一抹の不安を覚えます。

現在、導入種のスワルスキーカブリダニが天敵農薬として注目されています。本種はチリとは異なり、ジェネラリストとされていますので、本種の土着化についても今後注視する必要があると思われます。(2010年6月1日受領)



## ウンコ飛ばし！

小野田晃治  
(高知県在住)

私は農業に関わる会社に勤務していますが、当研究会会員の多くの方々と同様に私も昆虫の採集&飼育に関心がありまして、特にゲンゴロウの研究を自宅で行っています。水田の生物多様性の指標の一つとしてゲンゴロウやガムシが注目されていますが、一般の方々にはそれら水生昆虫は「ただの虫」という印象があり、その生態について明らかになっていない部分が沢山あります。今回は、趣味の研究を通じて発見したゲンゴロウの一風変わった生態を紹介します。

それは、Cybister属の一種マルコガタノゲンゴロウの幼虫が尾端を水面より突き出して水上へ液状の糞を排泄する行動です。

この行動は、私が本種を飼育し始めてすぐ発見できた事なのですが、他のゲンゴロウの幼虫を観察しても同様の行動や容器に糞の汚れは認められず、本種固有の排泄方法である可能性が考えられました。しかし、ゲンゴロウ類幼虫の排泄に関する文献は無く、水上排泄行動は特定の条件下のみで見られる行動であるのか、他種幼虫でも観察される一般的な行動なのか、不明でした。そこで野外実験やビデオ観察による室内飼育実験を実施した結果、水上排泄は野外実験下においても観察され、本種及びCybister属3種(ナミゲンゴロウ、クロゲンゴロウ、コガタノゲンゴロウ)幼虫の排泄行動を比較した結果から、本種幼虫では水上排泄のみが行われた事を確認しました。他の3種幼虫は水上排泄をせずに、水中にて下方や水平方向への排泄が認められ、この事も初めての観察事例となりました。これらの事をまとめ、水上排泄行動は本種幼虫の基本的な排泄方法であり同属3

種幼虫には見られない行動である事が示唆された、という内容で2009年の昆虫学会で発表しました。

現在までに判っているのは以上でして、本種幼虫が水上排泄をする生態学的な意義は未だ不明です。おそらくは、幼虫の糞の臭いが捕食者もしくは被食者に何らかの行動を引き起こしてしまう為、水上に排泄しているのではと予想していますが...。(蛇足：毎年6・7月のゲンゴロウ繁殖時期、当家では水槽周辺へ飛び散った糞の悪臭によって妻の怒りが最高潮に達します。)

上記のような予想の下、今後の実験方法を色々考えつつ、2010年夏の繁殖時期を迎えつつあります。  
(2010年6月2日受領)



図 1.マルコガタノゲンゴロウ幼虫による水上排泄  
(幼虫が水面上に尾端を出し、左上の方向へ液状の糞を飛ばしている)



図 2.ナミゲンゴロウ幼虫による下方排泄  
(写真右下、幼虫が尾端を砂に突き刺し、排泄している)

## 農地の生物多様性について思ったこと

菊池英樹

(秋田県農林水産技術センター農業試験場)

ここ数年、農業分野でも生物の多様性に対する関心が高まっているようで、国の事業でも取り上げられ、各地で調査・研究が行われているようです。学会や研究会等でも多様性に関連した発表を目にすることが多いのですが、その中で、一つ思い出したことがありました。

私は今から20年近く前になりますが、大学生の時に環境と昆虫の多様性との関係についていくつか調査を行ったことがありました。その一つとして、東京の都心部において水棲昆虫の一群であるアメンボ類の生息状況を調査し、生息環境との関連をみてみたのですが、その中で興味深かったことを紹介します。

アメンボ類の一種にババアメンボという小型のアメンボがいます。この種は環境省RDBで準絶滅危惧種とされており、全国的にも生息域が減少している種なのですが、皇居に隣接した抽水植物の存在する人工的な水域数カ所で生息を確認しました。ババアメンボは抽水植物の群落内の狭い開水面を主な生息場所としていることから、抽水植物の存在が定着の必須条件となっています。この人工的な水域に生息しているババアメンボは皇居内に存在する良好な生息地から飛来し、定着したものと考えられました。このことから、発生源があり、生息に適した環境が周囲に存在するとその範囲が長期的な生息域となりうることを示しているものと考えました。ここでは、ババアメンボを取り上げましたが、他のアメンボ類についても同様な関係が見いだされました。

この例は飛翔能力の比較的大きい特定のグループを対象としたものですが、これをあえて農地に当てはめて考えてみると、農地内の環境を良好に維持するだけではなく、湿地など生物の発生源となりうる場所の存在や、休耕田などそれに近い環境を一定間隔で設けることが農地の生物の多様性を面的により高めることにつながるものと考えます。

(2010年6月18日受領)

## 佐賀のオオクワガタ

口木文孝

(佐賀県果樹試験場)

農業改良普及所に勤務していた1990年頃、同僚・4Hクラブ員の間でオオクワガタ採集が流行っていた。そう、勤務していた普及センターはオオクワガタの日本3大産地である佐賀平野に位置していたのである。大きなオオクワガタを見せられて心が動く。現地指導の際に、「あの木とあの木で採ったよ!」と言われた瞬間に、アッと言う間にクワガタ屋に変心していた。

そして、「たくさん採る」、「彼らより、大きいのを採る」ことが目標となった。

しかし、採れない。ほぼ毎日通って、50mmオーバーの大きなクワガタは捕れるものの、オオ

クワガタは40mm台の情けない個体が数匹だけ。後で気づいたが、小生が行く時はご近所の少年達が見回った後なのだった。

夏中がんばったが、ぱっとしなかった。

ところが、9月になると、運が向いたように採れ始めた。そう、夏休みを終えた少年達は、クワガタなんぞに見向きもしなくなったのであった。ただ、大物は採れず、秋のまっただ中の10月10日体育の日に採集した63mmが最大であった。

.....

佐賀平野のオオクワガタは、水田やクリークの脇のクヌギやヤナギ類で採れる。

これらの木は、枝は焚き物として、落ち葉は肥料として利用されてきたとされている。このため低く刈り込まれ、台場クヌギのように洞があつてクワガタムシ類の餌場であるとともに、隠れ場所でもある。

さすがに、1990年当時は利用されておらず、圃場整備等の影響で本数は減っていたものの、まだ残っていて、大きくしないために刈り込みは続いており、クワガタ類は残っていた。

先日、かつて採集した場所を約20年ぶりに訪れたが、木はほとんど残っていなかった。「最近、カラスが増え、田んぼの脇の木はカラスのねぐらになっているので切った」そうだ。

近年、補助事業のせい、水田内の生き物に対する関心が高くなっているが、それ以外の生き物への関心が少ないように感じている。だれか、いろんな生き物がいることに興味を持ってもらえる方法をご存じないでしょうか。  
(2010年6月30日受領)

## 橿原市昆虫館がリニューアルオープン！

国本佳範

(奈良県病虫害防除所)

害虫防除に携わる会員の方の中にはかつての昆虫少年も少なからずいるのではないかと思います。そんな方に紹介したいのが、奈良県橿原市にある橿原市昆虫館です。実は今年6月にリニューアルオープンしました。セピア色だった展示物も一新され、これまでにはなかった体験型の展示が増設されています。特に、手を差し出すと光の昆虫が手の上に現れる“てのりぽっぷ”は小さい子供にも大人気です。また、新館ができ、研修施設も充実しました。ここでも参加型の企画が実施されています。

標本展示室の「人と昆虫」展示の中には、ミバエ根絶事業や生物的防除（飛ばないナミテントウ）も紹介されています。関係者の方は是非御覧下さい。

なお、放蝶温室ではオオゴマダラをはじめ、南方の蝶が優雅に飛んでいます。ここだけは時間

の進み方が違うようです。忙しい日常を忘れることができる癒しの空間です。

(2010年7月5日受領)

## オオタバコガの個体飼育を省いてみました

門田 健吾

(日本植物防疫協会研究所)

オオタバコガの飼育は、「個体飼育」にとっても手間がかかります。飼育経験のある方はご存じの通り、オオタバコガは「共食い」の性質が強く、1つの容器で飼い続けると、4齢幼虫～蛹の間に、半分以下に減ってしまいます。かじられた蛹はととても無残です。

この「共食い」を防ぐため、当研究所では、6穴のプラスチック容器(IWAKI製6穴浮遊培養用マイクロプレート)に、1穴ごとに4齢幼虫1頭ずつを入れ、個体飼育してきました。近親交配を避けるために3系統に分けていることもあり、閑散期で120ケース、繁忙期は倍の240ケース……。虫入れだけで半日以上費やしてしまうこともしょっちゅう。さらに、飼育が終わった後の洗浄もとても手間がかかり、洗い場はいつも山のように飼育容器が重なる状況でした。

これではいけないと、個体飼育省略のため検討してみたところ、「てんさい育苗用ペーパーポット(規格15号)」を広げて飼育タッパーに入れるだけで、共食いが減り、個体飼育のような大きな手間なしに現状並みの蛹を産出できるようになりました。ペーパーポットは、飼育タッパー内を菓子箱の仕切りのような形で区切れるので、適度に空間が確保できるため過湿になりにくく、しかも安価なので使い捨て可能などが利点です。以前は、のべ10時間以上(60秒以上/蛹:洗い物含む)かかっていた飼育時間をのべ3時間(20秒/蛹)に大幅短縮でき、空いた時間を他の仕事に廻せるようになりました。

きっと、もっと簡便な工夫もあると思います。ご存じの方、どうかお教えてください。

(2010年7月7日受領)

## ウンカよ来い!?

藪 哲男

(石川県農業総合研究センター)

石川県では、ウンカ類が過去の害虫になって久しい。セジロウンカの誘殺数は、No22の井上さんの鹿児島県にははるか及ばないが、昭和35年には年間誘殺数3万頭を上回る地点があった。かつては、県内に10か所あった予察灯も今では3か所しかなく、単純には比較できないが、ここ数年は年間誘殺数1000~2000頭の間で推移しているようだ。トビイロウンカに至っては、100頭前後となっている。



詳細な資料が残っている昭和40年から59年と平成3年から22年までの20年間のセジロウンカの誘殺状況を比較すると、そう大きく変わっていないようだ。年間誘殺数の平均はいずれも1000頭前後となっている。年間4000頭とか半旬に500頭以上など比較的大きな飛来があった年はいずれの20年間の間に確認されている。ということで、飛んできている虫の質はともかく数はそう変わらないようである。

被害はと見ると昭和40年代は品種や栽培方法も現在と大きく異なり、早生でも9月10日頃、晩生では10月10日頃の収穫でトビイロウンカのつぼ枯れが散見されている。50年代に入ってほぼ現在の栽培体系になってからはトビイロウンカの坪枯れ記録は見当たらない。昭和56年にセジロウンカによる坪枯れが記録され、本県初のセジロによる坪枯れのようなのだ。

最近の稲作をみると大規模化による作期分散や高温登熟を避ける晩植などで稲の作付期間が広がり、10月末に収穫期を迎える水田も見受けられるようになった。収穫期が後退すればするほどウンカの被害のリスクは高まる。被害を未然に防止し技術進歩を見せつけたいところであるが、少しは坪枯れが見たいと「ウンカ、いつ来るうんか？」を眺めつつ思うこのごろである。

(2010年7月12日受領)

## スズメバチに刺されちゃった

小山田浩一

(栃木県農業試験場 環境技術部病理昆虫研究室)

昨年の10月1日、いつもの何の変哲もない平和な一日になるはずでした。この日は、朝から他の部で場内の草刈りをしておりました。草刈り開始から30分も過ぎた頃でしょうか。わたしの元に庶務の課長から内線電話がかかってきました。草刈りをしていた何人かの人たちがスズメバチに刺されて病院に行っているとのこと、「病院からの話でスズメバチの種類によって解毒剤が違うので、種類の確認が必要とのことなので、おまえ虫担当なんだから確認してこい。」という内容でした。やれやれと思いつつ、虫取り網、酢酸エチル、脱脂綿、ポリ袋を準備し現場に向かいました。スズメバチたちは、かなり興奮している様子で、巣のあるドウダンの周りを中心にかなりの数の働きバチが、威嚇音を出しながらブンブン飛び回っています。こんな調子ですから容易に近づけません。メジャーなオオスズメバチやキイロスズメバチではないようでしたが、眺めているだけでは、種はわかりません。病院で苦しんでいる仲間たちを思うと早くせねばという気持ちに駆られ、意を決し捕獲することにしました。網を持ち、そお〜っと巣に近づきました。巣のまわりを警戒して飛んでいるハチを捕らえようと何度か網を振りましたが、臨戦態勢にある状態ですのでなかなか網に入りません。そうこうしていると、突然、大群で私の方に向かってきました。巣に近づきすぎたようです。あわてて、後ずさりしながらその場を離れようとしたのですが、情けないことに夜露で濡れていた草で足を滑らせ、仰向けに倒れてしまいました。「サンダルで来るんじゃないかった！」心の中でこ

んなことを連呼していたように思います。手に持った網を振り回し必死に応戦し、隙を見て立ち上がろうと試みますがなかなか立ち上がれません。しばし無様にもがいていると左肘に鮮烈な痛みが走りました。「やられた!」。具体的な危機を感じると人間とは不思議なもので、あれほどもがいても立ち上がれなかったのに、うまいこと立ち上がって逃げる事ができたようです。どのように立ち上がったかは記憶に残っていません。振り返りにあっている私の姿を見守っていた庶務の方に「モンスズメバチかコガタスズメバチです。」と再チャレンジする気持ちになれなかった私は、あてずっぽうに伝えました。

暫くして刺された左腕がみるみる腫れ上がってきたので、私も病院送りになり解毒剤の点滴を受けました。そのときに医師の方に聞いたのですが、オオスズメバチ用の解毒剤が違うだけで、その他の種類は同じだと聞かされ、がっかり。「種まで確認しなくてよかったのか・・・」。解毒剤の点滴を受け終わり、病院から戻ったときには巢に殺虫剤がまかれ、騒ぎは済んだと伝えられました。「最初から、そうすれば刺されなくて済んだのに!」どこに向けて良いのか分からない思いが沸々ともみ上げてきました。次の日から、弱った巢にオオスズメバチが略奪に来るようになりました。どこに向けて良いのか分からない私の悶々とした思いは、理不尽にも、そのオオスズメバチたちに向けられ、オオスズメバチたちとの緩やかな60日戦争に突入いたしました。

長くなりましたので、この話は別の機会にでも(そんな機会などないか。)

後日談ですが、当病虫研では試験用にいちごを栽培しているため受粉用ミツバチを購入しています。1作中に3, 4回ほど刺されることがあるのですが、今までは刺されても少々痛がゆい程度で腫れることなどなく気にも留めていませんでした。ところが、スズメバチに刺されてからというもののミツバチに刺されると患部がひどく腫れるようになり、少々困っています。

かつては、「スズメバチに刺されたら、どんな感じなんだろう?」とか「1回ぐらい刺されてもいいかな?」と虫屋としてのゆがんだ興味がありましたが、今回の話のとおり良いことはあまりないので刺されてもつまらないです。

ここまで読まれた方、つまらない馬鹿話に貴重なお時間を無駄にさせてしまって申し訳ありませんでした。

5, 6月に盛んに飛び回っていた女王バチは、このところあまり見かけなくなりました。きっと、営巢に精を出しているのでしょう。これからスズメバチたちの次世代発生の季節を迎えようとしています。くれぐれも皆様、スズメバチにはお気をつけください。(2010年7月9日受領)

## たまに見る虫, 毎年見る虫

市橋 秀幸

(岐阜県病害虫防除所飛騨支所)

20年ぶりに病害虫防除所に戻り, 単身赴任2年目の夏です。

去年は, リンゴの病害虫を覚えるので精一杯でした。今年は, 2年目と言うことで, 20年前を思い出しながら, 害虫のことに思いをいたしてみました。

岐阜県では, 近年, トビイロウンカは, ほとんど飛来が無く, 坪枯れも全く見ることはありません。若い普及指導員には, 坪枯れを見たことのない方も多いようです。20年前は, 時々大発生する状況でした。周囲の1株を額縁のように残し, 内側は全面坪枯れした水田も見たこともあります。20年の間に, いろいろなことが変わった, ということなのでしょう。

一方で, 毎年のようにお目に掛かる虫もあります。拙宅のもち米水田では, アオクサカメムシの幼虫, 成虫が穂にいます。ミナミアオカメムシ調査を兼ねて, テデトールを散布しています(爆笑)。

時々しか見かけない虫の生態や防除など, ノウハウの継承が今後の大きな課題になるのだろう, と感じています。

(2010年7月29日受領)

## 腰痛とイネクロカメムシ

西野 実

(三重県農業研究所)

ここ数年, 5月下旬から7月上旬にかけて腰痛の日々が続いています。その原因はイネクロカメムシです。三重県でなぜだか多いイネクロカメムシの調査で, 腰に大きな負担がかかっているからです。このカメムシは斑点米カメムシ類とは異なり, 株元に生息しているので, 調査では株をかき分けて株元の虫数を数えなければなりません。だから, 調査は中腰で前かがみという, 最も腰に負担をかける姿勢になってしまうのです。

三重県は, 水稻害虫の発生が特に多い地域ではありませんが, 2003年ごろからイネクロカメムシの発生が多くなり, 今では立派に害虫として活躍するようになりました。そんな訳で, 植物防疫協会からの委託試験の依頼も多く, 殺虫剤の効果試験を4, 5年行っています。某メーカー担当の話では, イネクロカメムシの試験が可能な試験場は全国で3試験場だけとのこと。依頼にこたえて, 実施したいのですが, 現地ほ場で試験を実施している都合上, いろいろ制限があって, その多くはお断りしています。申し訳ございません。

多いはずのイネクロカメムシですが, 箱施用剤の試験に限って, なぜか多く発生してくれません。毎年, 恒常的に発生が多い水田を試験ほ場に選んでいるにもかかわらず, 箱施用剤の試験で

は発生が少ないのです。そのままでは、発生量が少なすぎて判定できないので、最終的には株数を増やして調査を行うことになり、さらに腰に負担をかけることになっています。ちなみに、1人あたりの調査株数は、2008年では1800株、2009年では540株、今年は960株の調査でした。2008年はさすがに「体がどうにかなっちゃうな。」と感じたので、それ以降は、無理をしないようにすることにしています。まあ、試験結果がクリアならば報われるのですが、なんともその点が・・・。

三重県は早期栽培の水稻がほとんどで、4月25日前後に田植えのピークが来ます。イネクロカメムシの越冬成虫が水田に飛来するのは6月上中旬ごろからなので、箱施用剤で防除しようとするならば、よほど効果の持続期間が長い薬剤でないと難しいと思われます。しかし、ラジヘリ防除の地域や、大規模経営の担い手を除き、本田防除はほとんどおこなわない（おこなえない？）三重県の水稲害虫防除の実情を考えると、イネクロカメムシも箱施用剤でなんとかなると手っ取り早いのですが、そうはうまくいかないようです。これぞという箱施用剤をお持ちのメーカーがいらっしゃいましたら、よろしく願いいたします。腰痛をこらえて試験いたします。

(2010年6月10日受領)

## お知らせ

### 第20回天敵利用研究会開催のお知らせ

今年の天敵利用研究会は、東京農業大学総合研究所生物的防除部会の主催により埼玉県熊谷市で開催することになりました。今回は施設栽培で盛んになっているカブリダニの利用技術、および欧米で進んでいる植生管理などをふまえて、「第一部 カブリダニの利用：その現状と将来性」、「第二部 植生管理を活用した害虫管理」の2つのテーマについてお話しいたします。下記の要領で開催いたしますので、ぜひ多くの方々にご出席いただきたくご案内申し上げます。

#### 1. 日時

11月11日（木）13時～17時30分（受付：12時～、懇親会：18時～20時）

11月12日（金）9時～13時

#### 2. 会場

熊谷市立文化センター文化会館（熊谷駅南口徒歩5分）

埼玉県熊谷市桜木町2-23-2

TEL：048-525-4553 FAX：048-525-4554

#### 3. 特別講演

第一部 カブリダニの利用：その現状と将来性

- 1 キイカブリダニのバンカー利用などカブリダニ類を用いた害虫防除について

古味一洋（高知県農業技術センター）

- 2 カブリダニを利用したイチゴ栽培

畠山修一（埼玉県春日部農林振興センター）

## 第二部 植生を活用した害虫管理

- 1 リビングマルチとカバークロープを利用した害虫と雑草の管理技術  
山下伸夫・小林浩幸 (東北農業研究センター)
- 2 害虫管理における植生管理の重要性  
根本 久 (埼玉県農林総合研究センター水田農業研究所)

### <大会事務局>

天敵利用研究会・東京農業大学総合研究所生物的防除部会 (代表：榎井 昭夫)

事務局 〒360-0831 埼玉県熊谷市久保島1372

埼玉県農林総合研究センター水田農業研究所内 天敵利用研究会

TEL : 048-521-5041 FAX : 048-522-1840

e-mail : nemoto.hisashi@pref.saitama.jp (担当幹事：研究所長 根本 久)

参加をご希望の方は、天敵Wiki <http://wiki.tenteki.org/> の「天敵利用研究会／第20回」の項をご参照のうえ、大会事務局 (nemoto.hisashi@pref.saitama.jp) 宛てにお申し込みください。

## 第35回常任幹事会議事録 (概要)

日 時：2010年7月14日 (水) 11:00～12:15

場 所：熊谷市立文化センター文化会館 (埼玉県 熊谷市)

参加者：井村，江村，北嶋，行徳，後藤，西東，柴尾，豊嶋，中野，西野，西松，根本，春山，  
平井，古橋，本多，増井，丸山，本山，山本，和田，野田／埼玉大会事務局，  
本田，東浦／山口大会事務局，林 (敬称略)

欠席者：阿久津，上遠野，木下，西森，藤本，増田，宮井，宮田，村井 (敬称略)

### 1. 開会挨拶

### 2. 報告

(1) 前回 (第34回) 常任幹事会議事録の承認

(2) 事務報告

会員動向

平成21年3月31日現在： 443名

平成21年度 新規入会59名，退会16名

平成22年3月31日現在： 486名

研究会役員，都道府県幹事 (今期2010.1.1～2011.12.31)

県幹事は5名変更有り (詳細省略)

平成21年度事業報告

平成21年度予算執行状況報告 平成21年4月1日～22年3月31日現在 (概要)

(収入) 合計 2,183,960 円 (支出) 合計 530,027 円，(残高) 1,653,933 円

(3) 役員会報告

(4) ニュースレター, およびホームページ関連

ニュースレター担当より報告

- ニュースレターNo.24 発行報告, No.25 編集経過報告。8月中旬発行予定。
- カラーページの有無・ページ数による見積額の提示

ホームページ関連の報告

- 埼玉大会案内・プログラムの掲載。入会申込フォームの追加。

大会講演要旨のホームページ上での公開

- 当該大会開催の次の1月に発行されるニュースレターの時期とあわせてホームページにアップする事となった。
- 間違いが見つかった等により大会に出したものと掲載するものを変更したい場合どうするかが議論となり、一ヶ月以内に申し出たものについて変更して掲載する事となった。今回は大会中に掲載する旨を口頭で周知し、次回からは応募要項に「基本的に講演要旨はホームページに掲載する事とするが、諸事情で掲載を避けたい場合は申し出よ」と記載する事とした。

3. 議事

(1) 平成22年度事業計画案および予算案

平成22年度事業計画

平成22年7月 第35回常任幹事会, 第15回大会, 総会 (埼玉県)

8月 News Letter No.25発行

12月 第36回常任幹事会 (東京都)

平成23年1月 News Letter No.26発行

平成22年予算案

収入の部

科目	金額	摘要
会費収入	486,000	会員486名分
雑収入	2,000	講演要旨販売
前年度繰越金	1,653,933	
合計	2,141,933	

支出の部

科目	金額	摘要
編集・印刷費	400,000	ニュースレター印刷費
大会関係費	200,000	2010年度大会運営補助 (執行未了のため)
	200,000	2011年度大会運営補助
会議費	150,000	常任幹事会費用・交通費一部負担
事務費	30,000	通信費等
予備費	1,161,933	
合計	2,141,933	

(2) 第15回農林害虫防除研究会埼玉大会 (平成22年) の運営概況

野田 大会事務局長 (埼玉農総研) より説明

大会参加エントリーは175名余, 情報交換会は125名余

(3) 名誉会員の推挙

推挙

- 「廿日出正美 氏」「坂井道彦 氏」の推挙式を本日の年次総会で実施する。

(4) 剰余金削減対策案

- これまでいくつかの対策を施した結果、毎年繰越金を減少させている。  
ニュースレターも数年様子見をする事に決まっている事もあり、すぐに積極的な  
策を追加する必要はないと考える。

(5) ホームページへの「大会講演要旨」の掲載

(6) 第16回農林害虫防除研究会山口大会（平成23年）について

本田善之氏より報告。

6月上・中旬予定。シンポテーマは「持続性のある農業には何をすべきか」

(7) その他

## 農林害虫防除研究会会則

(名称)

第1条 本会は、農林害虫防除研究会と称する。本会の英語訳をAgricultural Insect Pest Management Society of Japan（略称 AIPM Society of Japan）とする。

(目的及び事業)

第2条 本会は、農林害虫防除に関する国内外の研究と技術に関する情報の交換を行い、会員相互の知識の高揚と親睦を通じて、農林業の発展に寄与することを目的とする。

第3条 本会は、目的達成のため次の事業を行う。

- (ア) 集会の開催 (イ) ニュースレターの発行 (ウ) 調査研究 (エ) 情報交換  
(オ) その他必要と認められるもの

第4条 本会の所在地は事務長の所属機関とする。

(会員)

第5条 本会の会員は正会員、賛助会員、名誉会員とする。

第6条 正会員は農林害虫防除の専門家及び本会の趣旨に賛同して年会費を納入した個人とする。賛助会員は本会の活動を賛助するため入会した団体、機関、個人とする。名誉会員は本邦農林害虫防除の発展に多大な功績があり、常任幹事会によって推挙された個人とする。

第7条 正会員ならびに賛助会員は別に定める年会費を納入するものとする。会費を2年間滞納したときは退会したものとみなす。

(役員等)

第8条 本会は次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 2名
3. 常任幹事 25名前後
4. 事務長 1名
5. 都道府県幹事 47名
6. 会計監査 2名
7. ニュースレター編集担当 1名
8. 情報担当 1名

第9条 役員任期は2年とする。ただし、会長は重任することは出来ない。

第10条 会長は本会を代表し、会務を統括、本会の円滑な運営を行う。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその責務を代行する。事務長は本会の庶務、会計を司る。常任幹事は会長、副会長、事務長とともに、常任幹事会を構成し、常時会務の執行に関し審議する。都道府県幹事は当該都道府県の会員の把握とともに、本会会務の連絡に当る。また、会務全般について具申する。会計監査は本会に関わる経理について監査を行い、総会に報告する。ニュースレター編集担当はニュースレターの編集及び発行を司る。情報担当は本会のホームページ、メーリングリストの管理を行う。

第11条 本会役員を選出方法は以下の通りとする。

- (ア) 会長、副会長は常任幹事会で選考し、総会で承認を得る。
- (イ) 事務長は会長が指名し、総会で報告する。事務長は補佐を数名任命することができる。
- (ウ) 常任幹事、会計監査、ニュースレター編集担当及び情報担当は会長が指名し、総会で報告する。
- (エ) 都道府県幹事は会長が指名し、委任する。

第12条 本会は必要に応じ専門委員をおくことができる。

(集会)

第13条 集会は総会、大会、セミナーなどとする。総会は原則として年1回、通常、大会期間中に開催する。大会は毎年6～7月に行う。

(会計)

第14条 本会の経費は会費、寄付金その他によってまかなわれる。大会の会計は別会計とする。

第15条 本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(付則)

第16条 本会則の変更は総会の議決による。

- 第17条
1. この会則は平成8年6月22日から施行し、一部改正を平成13年6月28日に行った。
  2. この会則の一部改正は平成14年6月28日から実施する。
  3. この会則の一部改正に伴い、会計年度を以下の通りとする。
  4. この会則の一部改正は平成20年6月26日から実施する。

平成14年度は平成14年1月1日から平成15年3月31日、平成15年度は平成15年4月1日から平成16年3月31日、平成16年度以降は同様4月1日から翌年3月31日。



## 農林害虫防除研究会名誉会員名簿

正野俊夫, 坂井道彦, 廿日出正美

## 農林害虫防除研究会役員名簿 (2010~2011年)

会 長 : 行徳 裕

副 会 長 : 山本敦司, 林 直人

常任幹事 : 阿久津四良, 井村岳男, 江村 薫, 上遠野富士夫, 後藤哲雄, 西東 力, 柴尾 学, 豊嶋悟郎, 中野勇樹, 西松哲義, 西森俊英, 根本 久, 春山裕史, 平井一男, 藤本博明, 古橋嘉一, 本多健一郎, 増井伸一, 増田俊雄, 丸山宗之, 宮井俊一, 宮田 正, 村井 保, 本山直樹, 和田哲夫

事 務 長 : 北嶋康樹

庶務幹事 : 山本敦司

会計監査 : 西東 力, 木下正次

ニュースレター編集担当 : 西野 実, 西松哲義

情報担当 : 本多健一郎

## 農林害虫防除研究会都道府県幹事名簿

都道府県	氏名	都道府県	氏名	都道府県	氏名
北海道	岩崎暁生	青森	川嶋浩三	岩手	藤沢 巧
宮城	増田俊雄	秋田	菊池英樹	山形	上野 清
福島	荒川昭弘	茨城	上田康郎	栃木	小山田浩一
群馬	<b>小倉愉利子</b>	埼玉	根本 久	千葉	上遠野富士夫
東京	小谷野伸二	神奈川	大矢武志	山梨	村上芳照
長野	栗原 潤	新潟	中野 潔	富山	<b>西島裕恵</b>
石川	藪 哲男	福井	高岡誠一	岐阜	市橋秀幸
静岡	<b>小杉由紀夫</b>	愛知	<b>三宅律幸</b>	三重	西野 実
滋賀	小嶋俊彦	京都	徳丸 晋	大阪	田中 寛
兵庫	山下賢一	奈良	井村岳男	和歌山	<b>井口雅裕</b>
鳥取	伊澤宏毅	島根	奈良井祐隆	岡山	佐野敏弘
広島	栗久宏昭	山口	本田善之	徳島	中野昭雄
香川	松本英治	愛媛	大政義久	高知	広瀬拓也
福岡	堤 隆文	佐賀	衛藤友紀	長崎	寺本 健
熊本	行徳 裕	大分	小野元治	宮崎	黒木修一
鹿児島	井上栄明	沖縄	谷口昌弘		

※表中の太字ゴシック体は2010年3月以降に交代した都道府県幹事。

## 研究会への入会方法

入会希望者は下記事務局までご連絡ください。入会年度のNews Letterと振替用紙（郵便振替：農林害虫防除研究会 00810-0-82999）をお送りします。年会費は1,000円です。入会フォームが農林害虫防除研究会HP（<http://agroipm.ac.affrc.go.jp/narc.html>）からダウンロードできます。

事務局：北嶋康樹

茨城大学農学部応用動物昆虫学研究室

〒300-0393 茨城県稲敷郡阿見町中央3-21-1

Tel: 029-888-8559 Fax: 029-888-8560

E-mail: ykitashi@mx.ibaraki.ac.jp

## 会費納入のお願い

2010年度会費の納入をお願いします。振り込み用紙を同封しておりますのでご活用下さい。会費は複数年分を同時に納入することが可能です。

2011年度までの会費納入状況については、西暦の下2桁と納入の有無を（ ）内に示してあります。（ ）内の○は納入済年度を、×は未納年度を、－は未加入年度を表しています。年会費は1,000円です。会費納入について不明な点があれば、上記事務局までお問い合わせ下さい。

住所不明でニュースレターが返送されて来る場合があります。人事異動等による所属、住所、送り先が変更となった場合は、事務局までお知らせください。今号の宛名ラベルが、会員名簿に登録されています。

## ニュースレターNo.26の原稿募集

ニュースレターは皆様の投稿で成り立っています。昆虫や防除に関連する文章の投稿をお待ちしています。文字数は400～1600字程度で書式の規定はありません。カラーの写真や図表も掲載できます。投稿方法は、(1)電子メール、(2)フロッピーディスク郵送、(3)手書原稿ファックス・郵送、のいずれでも結構です。

使用するワープロソフトは、Windows版の一太郎、Word、Ms-Dosテキストを歓迎します。また、「各種研究会等の開催案内」も受け付けますので、ご利用下さい。

編集担当：西野 実

三重県農業研究所 循環機能開発研究課

〒515-2316 三重県松阪市嬉野川北町530

Tel: 0598-42-6360 Fax: 0598-42-1644

E-mail: nishim30@pref.mie.jp

## 編集後記

今号から編集担当を担当することになりました。よろしくお願ひいたします。そして、早速ですが、発行が大幅に遅れてしまい申し訳ございません。すべて、私の不徳の致すところです。執筆者の方々ならびに会員の皆様には心よりお詫び申し上げます。

しかし、この夏の暑さは何なのでしょう？ニュースレターの発行が遅くなった原因にするわけではないですが、暑すぎです。今になってみると、7月に開催された第15回農林害虫防除研究大会（埼玉大会）は、梅雨明け前のいいタイミングで行われたなあと思います。もし、開催が1週間遅くなっていたら、最高気温37℃超えの中での開催だったようです。さすが熊谷市です。ちょうどいい時期に大会日程を設定していただいたことも含め、埼玉大会が無事に開催できたのも、大会事務局の方々のご尽力のたまものだと思います。どうもありがとうございました。

この暑さも含め、今後、気象はどう推移するのか、なかなか読めませんが、今号が皆様のお手元に届くころには、ちょっとは過ごしやすくなっていれば良いのですが・・・

（編集担当 西野 実）

\*\*\*\*\* ニュースレターNo.25 (2010年9月発行) 目次 \*\*\*\*\*

<巻頭言>

防除技術は生産者に使われて育つ 行徳 裕 … 1

<ニュース>

チリカブリダニが静岡県の茶園で蔓延(はびこ)り始めた!?! 小澤朗人 … 3

ウンコ飛ばし! 小野田晃治 … 4

農地の生物多様性について思ったこと 菊池英樹 … 6

佐賀のオオクワガタ 口木文孝 … 6

檜原市昆虫館がリニューアルオープン! 国本佳範 … 7

オオタバコガの個体飼育を省いてみました 門田健吾 … 8

ウンカよ来い!?! 藪 哲男 … 8

スズメバチに刺されちゃった 小山田浩一 … 9

たまに見る虫, 毎年見る虫 市橋秀幸 … 11

腰痛とイネクロカメムシ 西野 実 … 11

<お知らせ> … 12

<第35回常任幹事会議事録(概要)> … 13

<農林害虫防除研究会会則> … 15

<農林害虫防除研究会名誉会員名簿> … 17

<農林害虫防除研究会役員名簿> … 17

<農林害虫防除研究会都道府県幹事名簿> … 17

<研究会への入会方法> … 18

<会費納入のお願い> … 18

<ニュースレターNo.26の原稿募集> … 18

<編集後記> … 19

<著作権>このニュースレターに掲載された記事の著作権は当研究会に帰属します